

国に命を預けず、自分の生き方は自分で決める。

人が集まる場所があつたこと、そのおかげで事故後、早い段階から活動を始めることができます。

安全かどうかは私が決める



interview

片岡 輝美さん

インタビュー◎片山 幸子(編集者)

仲間とともに、いのちが大事にされる社会をめざして



書籍や資料のコーナー



測定室



山崎先生の健康相談会の様子



ミーティングルーム

「ちゃんとわかつてよかったです」と、とても喜んでもらいました。

一方で、測定結果から厳しい現実を突きつけられることもあります。お母さんたちが持つて来た子どもの靴からはkg当たり100ベクレル超え、体操着からは数十ベクレルのセシウムが検出されました。そういう時は「私の判断が甘かった」と、早く測定して事実を掴めばよかった」と、自分を責めるお母さん達の隣で、私たちスタッフも肩を落とすしかありません。でも、測定して数値を知ったことにより、お母さんたちは、靴や体操着をこまめに洗ったり、室内に放射性物質を持ち込まないようにしたり、保養には新しい靴を持参するなど、被ばくのリスクを下げるために、具体的な対策を自ら考えていくようになります。

大切なのは、結果に一喜一憂することではなく、測定データから明らかになつ

たことを、無用な被ばくを避けるためにも普段の暮らしの中に生かすことです。

事実と向き合うのは、時々とても勇気の

いることですが、原発事故後を生き抜くための、大切な第一歩です。

思いに寄り添う場として

センターの活動のもう一つの柱は、人の思いに寄り添うことです。

原発事故後、被ばくを不安に思うのは過剰反応だという空気が蔓延していま

す。不安を感じる人たちが、「私だけがおかしいの?」と思いつ悩まなくてよいよう、誰でも参加でき、自由に持

ります。センターの活動のもう一つの柱は、人の思いに寄り添うことです。

県外から医師を招いての健康相談会も開いています。和歌山県から来てください

る内科医の山崎知行先生は、チエルノ

ブリの知見にも明るく、大変頼りにな

私たちの住む会津若松市は、事故を起こした原発から西に100kmに位置します。県内の他の地域に比べれば放射線量が低いため、避難指示区域からも、区域外からのいわゆる「自主避難者」の方も、多くの方が避難生活を送っています。

「会津は安全」といわれることが多いのですが、事故前に比べたら格段に高い放射線の中で暮らさねばならないのは事実です。「ほかの地域と比べてどうか」ではなく、「事故前と比べてどうか」という物差しで事故の影響に向き合いたいのです。

震災後、2011年5月には「放射能から子どものいのちを守る会・会津」を立ち上げました。以来、給食の食材や屋外活動などについて、会員の要望を集約して行政や教育委員会に出すなどの活動を行っています。

そして2011年の7月、国や専門家の発表する情報をただ鵜呑みにするのではなく、市民の立場から主張的に情報を入手し、自分たちで安全かどうかを判断しようと、放射線量の測定などを行う「情報センター」を立ち上げました。

2つの団体の設立の背景には、2005年2月から毎月学習会を開けてきた「九条の会」の存在がありました。憲法について学ぶこの会でつつかつた人のネットワークがあつたことと、教会という、

私たちの活動の1つの軸は、数値の収集と情報の発信です。センターでは、ガイガーカウンターやガンマ線測定器などを入手し、生活圏内の放射線量の測定や、食品の測定などをています。

私たちの基本姿勢は、「安全かどうかは私が決める」ということです。私たちは、検出された数値が危険かどうかの判断はしません。その数値をどう捉えるかは、一人ひとりが判断することだけ思っています。ですから、自身で判断するのに役立つ情報を、できるだけ多く提供するように心がけています。

また、ネット上への測定値の公開もしていません。たまたまその日測ったトマトやピーマンの数値が高いからといって、市内の違う畠で採れた野菜でも同じ数値が出るとは限りません。会津地城ですから、数値だけが独り歩きしないよう、データの出し方には配慮が必要です。

測定をしていてよかつたなと思うのは、安全が確認できた時ですね。「郡山市に暮らす娘から、放射能が心配だから、お米を送ってこないでと言われた」と、自分の家の田んぼで作ったお米の測定に来られた方がいました。ドキドキしながら測定してみると、結果は非検出(検出限界値は10ベクレル/kg)。「これで娘にお米を送れる。きっと